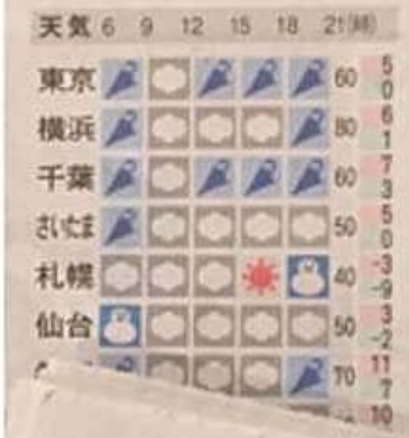
©朝日新聞社 2016年　46590号（日刊）

2016年（平成28年）
1月30日
土曜日

朝日新聞

b1
be on Saturday



はたらく気持ち　田中和彦

被災地体験研修広めたい

Mさん（男性、46歳）は、2カ月おきぐらいの頻度で、東日本大震災の被災地を訪ね続けている。企業の社員が、研修の一環として被災者たちの話を聞きに訪れる「いのちてんでんこツアー」を運営する仕事だ。

「てんでんこ」とは三陸地方の方言で、「各自」「めいめい」といった意味。「いのちてんでんこ」とは、まずはそれぞれが己の命を守れという教えだ。津波の時は、とにかく一人ひとりで高台に逃げると決めておけば、だれかを助けに行って逃げ遅れることを防げる。何度も被害に遭ってきた地域ならではの、命を守る知恵だ。

人材開発会社の社員だったMさんは、震災の半年後、岩手県のバス会社から、復興ツーリズムの一環として震災の体験談を聞きに行く企画の提案を受けた。意義を感じたMさんは「やりましょう！」と意気投合。上司らの了承も取り付けた。

まずは自ら現地に赴いた。人口の1割の犠牲者を出した大槌町で、人々の話に耳を傾けた。地元団体のリーダーの復興に向けた奮闘話や、波にのまれて九死に一生を得た旅館のおかみの体験談は涙なしには聞けず、いつの間にか生きることの意味を自問している自分に気付いた。従来の企業研修にはない、人間力が養えるような体験型研修になるのではないか。そんな可能性が実感できた。「たくさんの人に体験して欲しい」という思いに、突き動かされた。

戻って顧客企業に営業をかけたが、CSR（社会貢献）活動やリスクマネジメント研修と誤解され、なかなか狙いを理解してもらえない。数カ月後にやっと、「体感型の研修を探していた」という企業に出会い、校長候補の部長たちをツアーに送り込んでもらった。

盛岡駅から三陸沿岸に向かうバスの中で震災の全体像を予習し、現地で語り部たちの話を聞く。参加者たちは、1泊2日の間に様々な気付きを得て帰る。研修後は、リポートの代わりに、触れあった語り部たちへの手紙を書いてもらった。

手紙は「人は言葉で動くのではなく、熱意や行動を見て動くのだと、反省させられた」といった根源的な気付きに言及したものが多く、研修企画の意義を改めて確認できた。

Mさんは「いのちてんでんこツアー」の企画を引き継ぎ、独立したいと会社に相談した。上司らは「君以外にはできないよ」と、快く事業譲渡してくれた。昨年10月のことだ。

ツアーは、まだ開催頻度こそ多くはないが、新会社の研修メニューの柱のひとつだ。「続けることに意味がある」。Mさんは、この企画を育てることをライフワークにするつもりだ。

たなか・かずひこ　人材コンサルタント兼映画プロデューサー。転職雑誌の元編集長。『42歳からのルール』『課長の会話術』など著書多数。